

1. 教育の責任

核家族化が進み地域社会が「個」として分断されている時代に育った学生は、高齢者の生活や価値観を感覚的に理解することが難しくなっている。そういった背景の中で異なる時代を生き抜いてきた高齢者が自らの心身の状況や老いをどうとらえ、どのように折り合いをつけながら生きていっているのかを時代・教育・文化的背景と個々の歴史・価値観を捉え理解し、多様な高齢者が終生期を自分らしく豊かに過ごすことを支えるケアとは何かを思考し、展開できることを目指す。またますます高齢化が進む中で、卒業後も臨床現場や地域社会において高齢者看護やそれを支えるシステムを創造していける人材を育むという一翼を担っている。

2. 教育の理念

国際看護学部のディプロマポリシーである「国際化する社会に暮らす人々に寄り添い、多様な人々の営みを理解、受容し、個人の価値観、信念、宗教観、生き方を尊重することができる」を踏まえ、自分とは異なる時代背景を生きた高齢者の生活・文化を尊重し、寄り添い、高齢者が最期まで自分らしく豊かに生きることを支える看護を創造する能力を養う。

3. 教育の方法

<教育の目標・工夫>

高齢者は、ニーズの表出が難しいことが多いため、行動や言動、表情や生活のあり様からいかにニーズを捉えていくのが重要である。また高齢者の立場に立って身体的・心理的・社会的な変化の影響を類推する力も必要である。そのため、高齢者看護学概論、多様性と高齢者では、日本における高齢者の現状・加齢による心身の変化だけでなく、高齢者疑似体験演習での体験的な学びや身近な高齢者への生活聞き取り演習からその人の大切にしていることや価値観がどのように生活に浸透しているのかを学んでいる。以上の内容を踏まえ、高齢者看護援助論Ⅰにおいては、事例を用いながらより具体的な高齢者によくある疾患の看護をわかりやすく伝え、ディスカッションや質問応答形式を取り入れながら主体的に知識を得るための工夫をしていく。また、臨床現場で必ず出会う食事介助・嚥下訓練・排泄ケア、ベッド上での体位変換時に圧力センサーを利用して褥瘡を予防するための体験演習等、マルチタスク演習を通して観察・アセスメント・実践の基礎の体得を目指す。学生自身が「感覚的にわかる」ことや、演習の中での疑問点とその解決方法について理解し実習に繋がられるようにする。高齢者看護援助論Ⅱの看護過程の演習では認知症高齢者の事例を用い生活者としての高齢者を理解できるように作成した枠組で、ロールプレイでのやり取りの場面記述とカルテ等の情報を整理し対象者の総合的理解をどのように行っていくのか、対象者の看護の方向性をどう考えていくのかについて学生自身が思考し、目標指向型の看護を学ぶ機会を設け支援する。

<学生との接し方>

将来医療現場に立つプロとして身につけておくべきマナーについて TPO をわきまえることができるように指導もしつつ、学生が安心して自分の意見を述べ、間違えることができるように意見を否定せず、意見を述べやすい雰囲気作り、関係性作りに努める。

高齢者看護学実習では学生1人が一人の高齢者を受持ち、老健施設あるいは療養病院で人生の一部を過ごし、生活を送る「生活者」と捉え、全体的な理解ができるよう支援していく。受持ち高齢者とのかかわりの中から情報収集・アセスメント・看護計画立案・実施・修正の体験を通して実際に対象高齢者の生活をふまえた目標指向型の看護を感覚的に体得することを支援する。日々のカンファレンス・指導者と学生間の調整・記録による現象の理解の支援を通し、最終的に高齢者看護を創造していく能力の基礎を培えるよう支援していく。

4. 教育の成果

高齢者看護援助論Ⅰ・Ⅱの講義では講義に対する感想をエルキャンパスから提出してもらっている。学生からは事例を用いた講義や具体的な疾患の説明・視覚的にわかりやすくイメージしやすい図表や動画をもちいた講義について「〇〇がわかりやすかった」「〇〇について良くわかった」「実習で知識を役立てたい」という感想が多かった。また認知症高齢者の世界が理解できるよう、当事者や家族の思いがわかる動画の視聴してもらった。それは認知症本人の辛さや家族の苦しさに触れ、疾患ではなく「人」としてみる土台作りに繋がったようである。演習では実際に臨地で必要になる技術について実施しその観察項目と技術のポイントについて学生が主体的に考えられるように工夫し、その後各教員がグループごとにファシリテートを行なったことで効果的な学びになっていた。次年度以降もまずは学生が主体的に考え、その後ポイントを一緒に押さえて知識と技術を効率的に吸収でき看護について考える能力を伸ばす支援を行っていく。高齢者援助論Ⅱでは、教員が難聴と白内障の認知症高齢者モデルとなり、加齢による感覚機能の低下や認知機能の低下を鑑みて一人の人として関わっていくのかについて実習前に場面を設定し、関わりと反応の中から高齢者の全体像を把握していく過程を体験してもらうことで、実習においても関わりのハードルが下がったという意見が多く聞かれている。

5. 改善への努力と今後の目標

* 目標に対する自分の課題

①学生自身が感覚的に「わかる」ことを目指しているが、加齢による身体の変化と疾患の特徴について視覚的資料や主体的学習をもっと取り入れていく。

②看護学実習では学生の問題解決型思考を目標指向型思考に変換するのに1週間かかる。高齢者を生活者としてとらえるための実習記録の枠組みを新しく作成した。看護過程Ⅱでは生活者の背景が良くわかる事例の作成を行う。

* 課題の解決方法と計画

実習記録の枠組を「暮らし、身体状況、つながり・かかわり、大切なもの・こだわり、思い」の5つから編成しライフヒストリーも組み込んで、今ある高齢者はこれまでの生活の連続であることを理解できるようにする。またその先に今後の高齢者の生活が続いていくことを考えて、現在のケアをどうすればよいかという思考になるように学生の中から看護を引き出し、ファシリテートしていく。

次年度

* 今後の計画

1月中旬に次年度の各講義について内容を再検討しビジョンとすり合わせ学生が感覚的に「わかる」講義・演習、その延長としてさらにケアの意義まで落とし込めるように学生の特徴や能力を見極めながらファシリテートできるようにしていく。

【添付資料】

